

現代の意識における葛藤のなさの諸側面について

橋 本 尚 子

はじめに

現代においては、発達障害的心性や、発達障害とも言い難いグレーゾーンの増加、また従来の定型発達からのずれがむしろ普通になってきている現状、あるいは障害ではなく現代の意識の一般的特性として「モードとしての発達障害」(田中 2016)ということが言われている。そのような中で、困ってはいるが悩んではいないなど、悩みがあって来談するという従来の心理療法、つまり患者の主体を前提とした心理療法が通用しにくい事例が増えており、新たな治療的関わりが心理療法、精神分析などの現場でも模索されている現状がある(河合 2010; 内海 2015; 平井 2006)。

橋本(2017)では現代において、インターネットやSNSなどの普及により、それ以前の時代であれば自然に獲得された「自分の現在地」を見つけることが難しくなっているのではないかと述べた。また自分の現在地の不確かさが、リアリティーの持ちにくさ、葛藤の生じなさ等ともつながって、現代的な意識の特性が発達してきているのではないかと考察した。

本論では、まず事例を通して見えてくる自分の現在地のあり方を心理療法が日本で普及し始めた頃と現在とでどのように変化してきているのかを考え、その後、様々な側面における葛藤のなさを見て行く。

1. 事例における自分の現在地のあり方—70年代と現代—

養老武(2014)は自分というのは、地図の上の現在位置が矢印によって示されるその矢印くらいのものではないかと述べる。全体の地図の位置関係の中で、自分の位置がわかることが「自分」に気づくことではないかということである。そのような自分の現在地がつかみにくい時代になっているのではないかということを橋本(2017)では考察した。

では、実際の事例から見えてくるその様子は、どのようなものであろうか。河合隼雄の不登校の高校生の事例(1986, p26)においては、夢分析がなされた全ての夢が省略されることなく記載されており、夢の流れから、高校生の心の変遷を追うことができる。この事例は1970年代のものであり、やはり現代とは異なる意識を感じさせるものでもある。その中で最後の方に提示される夢がある。

夢17 小学校時代のMらと校庭で遊ぼうと思って集まっていた。でもボールがないので、ポカンとしていたとき、隣のSが自転車でボールを持って走ってきたので、僕がタックルしてボールをとりあげた。そしてバレーボールをした。ボールが空高く弾んでいた。

この夢は、この高校生がタックルをしてボールをとりあげるなど、今までなかったやや「がらの悪い部分」を統合した行為と河合は解釈している。しかし何よりも、筆者には、タックルして取り上げることにまつわる明確で確固とした実体のある身体を感じさせるものであり、また心的な空間の垂直的な広がりも感じさせ、こちらの心にもその情景が浮かぶようである。自分は地上にいて、そこでしっかりと身体として位置を占め、弾むボールは自分と空の間を行き来し、自分はボールを弾ませながら、下からその情景を見上げているというものである。

対象的に思えるものを岩宮(2015)の事例から引用したい。高校生女子で、何となく相談室に来談はするものの、SNSでの友達とのつながりの話から、なかなか心理的な自分の話への展開が難しかった事例である。3年間SNSでの友達の話が続いた後に以下が語られた。

「ある時スマホを触っていて、グーグルマップの画面で、自分の家の住所を入れるとばっちりと自分の家が正面から映し出された。しかもそれは、改築前の(1年半前の)ものだった。びっくりしていると、触っていないのに、急に空からの場面になり、自分の家を空中から見下ろす画面に切り替わった。「何か、世界の中に自分がいることがよくわかった感じ」」

このあたりから初めて、改築前の家の様子が語られたり、自分の好きなものや嫌いなものが語られたりということが始まったという。従来のオーソドックスなカウンセリングであれば、カウンセリングの始まりは、まさにこの自分についての語りからであったと言える。自分についての語りであり、自分の置かれている状況、そこでの苦しみ、葛藤や悩みと言ったものから始まるのがスタンダードであった。しかし岩宮の報告しているこの事例では自分についての語りにいたるまでに3年間という非常に長い時間を要している。自分についての語りがカウンセリングのスタート地点にはならないことが、従来とは大きく異なる点であろう。

また、その後の経過では、徐々に症状が明確になり、身体化が生じ、目だけや身体の部分だけというばらばらな身体が描画に描かれる様子が報告されている。自分への意識が生じた後にも、身体としての自己感を持つためにはまだまだ長いプロセスが必要であったと岩宮は述べている。

これを上述の河合の報告している高校生の夢と比較すると、身体性の無さが際立つと感じられる。実際に実体のある身体として何かを経験するのではなく、画面でのヴァーチャルな体験が、この女子高校生の新たな認識

をひらくことにつながっている点も従来にはないことであろう。この少女の場合は、それが空からの視点であった。このような視点を持つことは、70年代では航空写真かイマジネーションの世界であろう。現代では、そのようなことが家にいながらにして普通に経験できる。この地上にいる自分を簡単に離れて、空的な単なる視点となり空から地上を見下ろすことができる。しかも地上に場面が切り替わって映ったのは、数年前の改築前の自分の家である。この現実の時間や空間から簡単に離れて、違う空間や時間に出会えるのである。そして逆説的ではあるが、この体験を通して少女は全体を俯瞰する視点を得て、スマホやツイッター上の友達との過剰な関係性から引いて、自分を少しずつ語ることができるようになったという。このような視点の後、身体化や描画を通して地上に生きる身体としての自己感(岩宮によると、自分の現在地)を長いプロセスを経て得ていったようである。

河合隼雄の事例に提示される夢のシンプルさ、それは、身体がここにある、自分がここにいる、空は上にあり、ボールはボールとしてその両者の間を行ったり来たりするという自然な動きや健康さを感じさせる。地上における自分の現在地をわざわざ確認する必要のないほど、それは確固としたものであったのではないだろうか。当時は不登校も珍しく大変な事例であったと思われるが、回復の兆しのみられる時点での、夢における身体性の健やかさは印象的であり、この高校生個人のものでもあるだろうが、時代のものでもあるのかもしれない。

同じ心的な空間の開けを考える時にそのあり方にはずいぶん大きな差があることを思わせる。現代では50年前には持ちえなかった新しい意識、また意識の体験のされ方が生じてきていることを感じさせる。その代わりに、昔の高校生が持っていたような素朴で素直な身体感覚や意識のあり方は、私たちの時代には失われつつあるものなのかもしれない。河合が述べるような意識のあり方は、上下、自分と宇宙、ボールの上下の運動など、構造が非常に明確であると言える。心理療法は、このような意識のあり方を前

提として生まれてきたといえるだろう。河合は意識に対する無意識としてあの世や異界という言葉を使うが、これもまた、こことあの世という一つの構造である。この世の現実には縛り付けられてあまりに苦しい時に、あの世という異世界を体験することで、この現実自体がより厚みをもったものとして認識し直されるところに、心理療法が機能する面があったと言える。また自分の現在地が非常に自明のこととしてあるので、自分を振り返ることがしやすく、カウンセラーはそれを黙って聞くということが非常に意味を持ったのであろう。

心理療法が普及し始めた頃には、考えられなかったツール、インターネットやSNSなどが普及し、それにともなって人間の意識や心も変化してきているのではないかという点について、この2つの事例を見比べるとその印象は顕著である。

昔であればイメージの中でしかできなかったことが、ネットというツールでは簡単に視覚的に体験される。現実の時間や空間から離れて違う時空に簡単にいけてしまう。そのような体験が生まれた時から普通にある時代に生きる者にとって、自分をこの世界に定位して語るということは、新たに身に着けなければならない一つの視点なのかもしれない。

2. 二項対立の不在・葛藤不在・他者不在

先述したが、従来の心理療法が前提としていた意識のあり方は、この世とあの世、こちらと向こう、生と死、親と子、自分と他者、身体と心など、様々な二項対立が成立していることを前提としていたといえる。だからそこに葛藤や悩みが生じたわけである。現代では、あまりその二項対立が明確な構造を持たなくなっているように思われる。自分と他者といっても、ほとんど他人が認識されていなかったり、世間という意識も希薄になってきている。葛藤も生じにくい。それらをいくつかの面から見てみたい。

1) 対人恐怖症

対人恐怖症は現代では激減していると言われている。山下・笠原は(1985 p5, 6)対人恐怖症について、「基本的な対人態度も相手の気持ちや感情を大切に配慮的に振舞える半面、決して没我的ではなく自尊心や良い子意識なども強い」とし、定型例では、「相手の気持ちを大切に、相手に好かれ親しまれることを強く望む少年が、家庭から学校や職場など周囲との人間関係が特別に重要な意味を持つ集団の中で新しい人間関係に入る際に生じやすい」と述べる。また中村(1985, p16)は「親子間に愛情をめぐる葛藤がみられる」としている。そこには、対人的状況があり、はっきりと他者の存在とそれに対峙する自分や葛藤が認識されていると言える。

また、藍沢(1985)は、対人恐怖の背後には性的葛藤や社会的自立の葛藤があることが知られるとしている。馬場(1985)は対人恐怖症者は、エディプス的な葛藤をもちやすいこと、また近藤を引用し「人に好かれなければならない」という要請は「優越しなければならない」という要請と矛盾するために、我が国の配慮的状况の中では後者が抑圧されなければならない、この内的葛藤が対人恐怖症の対人関係の不安定性や羞恥の感情を生み出す」と述べる。鍋田・宮岡(1985, p29)は対人恐怖症に含まれるものとして醜形恐怖症について考察しているが、背後に家族間葛藤や同胞葛藤を見出している。実際に1985年の精神科mook対人恐怖症には、様々な症例が記載されているが、多くは内的葛藤を何らかの形で抱えているものが多いようである。

畑中(2016, p164)が、対人恐怖概念の変遷としてまとめたものでは、60～70年代にかけての対人恐怖の特徴として、「他者に対して感じた恐れが「自分」に集約されていくことで、はっきりとした葛藤構造が作り出されていたことである。」と述べ、「新福が「ひと恐怖」ではなく「おのれ恐怖」であると指摘したように、「対人」恐怖とはいいながらも、その症状は自分の作り出す不安に起因する。顔が赤くなる、目つきが陰しいなど、「様々な症状を自分自身に発見し、あるいは自分自身の中に作り出して不安を感

じ、それを人が見ると変に見えるのではないかと恐れる」状態は、自分自身の否定的・攻撃的な見方が他者へ投影されるというメカニズムを基礎にする」としている。それが70年代後半には「伝統的な青年期のノイローゼ」としての対人恐怖はほとんど見られなくなったと指摘し、「ふれ合い恐怖」という新しい対人恐怖の形を提唱した。内省傾向が乏しいとされ、当初は「恥」の病理とされた対人恐怖も、この頃よりその中核的心性が「おびえ」へ移行していることが指摘されるようになっていく。そして「古典的な対人恐怖の症状が顔や体臭など自身の身体に関わっていたのに対し、近年の関心がもっぱら他者と自身の関係を通して表現されるようになってきていることにも関わりが深いであろう。かつての対人恐怖がおのれ恐怖であったのに比して、現代の対人恐怖はまさに「対人」的である。裏返せば、現代の対人恐怖は他者との間にあるために、自分の内側で葛藤しているだけでは解決できない問題になっているということなのかもしれない。」と現代の対人恐怖には自分の中での葛藤自体があまり問題にはならない様子について述べている。

現代では従来の対人恐怖にあったような葛藤を持つ前に人前から引きこもってしまうので、対人恐怖症が激減していると河合(2008, p248)も述べている。実際に筆者が学生相談で出会った対人恐怖的な学生も、オーソドックスな対人恐怖症者が持っていた「自意識や他者への意識」自体は弱く、漠然と人が苦手で話せないというものであった。「人と話すと緊張で涙がでる」という学生に、「泣いてもいいから、そのまま話をしてみる練習をしてね」と言うアドバイスをし、クライアントは日常で人に話しかけたり人と一緒にいる体験をし、一緒にカウンセリングでそれらについて色々と考えて行く中で、人と話ができるようになったものなど、対人恐怖とは言い難い。どちらかというと、家族内でも会話が少なかったり話しにくい雰囲気があり、親に自分の気持ちを聞いてもらった経験も薄く、ベースとしてそもそも人と話すという自然な体験が少ないまま成長しており、社会的には自我の未成熟や対人経験の不足、人と話したことの少なさなどが問題

であり、内的葛藤からは遠い印象であった。

2) 摂食障害・自傷行為・強迫神経症

野間(2012, a)は「拒食症、過食症といった摂食障害では、自己評価が低く他者からの評価に対して敏感な傾向が認められるが、その中でなんとか自己表現しようとあがいた結果、やせて他者に対して優越し他者の視線を集めようとするのが拒食症であり、拒食の破たんを契機として自己処罰や解放感を求めて衝動的に過食嘔吐を繰り返すのが過食症だった。ただ、近年見られるむちゃ食い障害では、そのような苦悩から逃れようとする積極性は認められず、生への執着に乏しい。そこには内的な空虚感を満たそうとする受動性があるだけである。(p119)」と述べる。「自傷行為についても、他者へのアピールの側面が強調される傾向があったが、二一世紀になって、解離性の意識の変容を伴った、自己完結的な自傷行為が増えている。それは、自らの苦悩を引き受けることなく、他者に対しても自分に対しても苦悩を隠べいしようとする姿だと理解される。(p129)」としている。

また、成田も同様に強迫神経症について述べる中で「一人の人格の中に矛盾したものを抱えその葛藤や両価性(アンビバレンス)に悩むのではなく、容易に別の人格になってそれぞれの側面を生き、葛藤を悩むことを巧みに回避している。そうするとむしろ容易に人格への統合への努力を放棄するようにみえる。現代の青年期患者は、そのような努力、奮闘を放棄して、矛盾・葛藤をそのまま並置させたままで生きる方向へと変化しつつあるらしい」や「最近の青年期患者の中には、自己を内省するのではなく、もっぱら他者を責め、他者に要求するものが増えてきていうように思われる。彼らは不安や葛藤を自分という一人の人格の中に抱え主観的に悩むことができなくて、分裂したり解離したりして葛藤を回避するか、あるいは葛藤を「むかつく」という形で吐き出して、他者に担わせようとする」(成田 2002, pp97-98)と現代の青年についてその印象を述べている。

従来の摂食障害や、自傷行為については、他者との関係がどこか希求さ

れている面があったといえるが、現代においては、そうではなくなってきており自分の中で閉ざされた印象であるといえる。これは、筆者自身も現代の摂食障害の患者から感じる点である。明らかにこちらから見ると摂食障害であっても、本人はそのことをあまり悩んでおらず症状としての認識よりも日常での他の困り事が中心に語られるなどがみられる。これもやはり、リアリティーに触れてそこへ自分を開こうとする苦悩というよりも、自分に閉ざされた世界に留まろうとする側面であるように思われる。何らかの苦しみや傷つきがあるのだが、内面でそれを引き受けるのではなく、苦悩を自分自身にも隠すような形である。ここでも葛藤や悩み苦しむということが避けられているといえる。

3) 外見や身体などの容貌と自分であること

外見や身体についても、昔は運命的なものであり、たとえ外見や容姿に不満があっても自分自身で折り合いをつけて受け入れていくのが一般的であったが、現代では整形や筋トレによって自由に作り変えられるものになっている面もある。コンプレックスを抱えることで何かが育つというよりも、整形などで簡単に好きな自分を得ることができ、葛藤自体にあまり意味が見出されない風潮もある。整形について、谷村(2008)は以下のように述べている。「昔は男性を誘惑するための他者指向的整形から、現代では自分の満足のための整形へと変化してきている。」現代ではもはや整形は普通に口にされる一般的话题でもあり、昔のように人には言えないもので、容姿に葛藤があり、整形を繰り返すような神経症的整形ではなく、「before afterなき整形」へと変化してきたと言われている。「本来、誘惑、ないし恋愛への欲望が原動力となって生まれたはずのモードから、恋愛の要素が抜け落ちたり、薄まってきたりしている(中野 2010)。」他者を意識した上での整形というよりも、自分自身の満足に重きが置かれてきていると言える。

また「モテ意識」が現代では非常に低下してきている(日本経済電子版2014

／9／15)という調査にも示されるように、逆に全く外見に注意を払わず、場合によっては不潔で風呂に入らないために臭うという「スメハラ」という言葉も生まれている。これは、他者への意識がなさすぎて外見を気にしないという、対極的あり方と考えられるだろう。

4) 親子関係の変化

親子関係も、親が大人として子どもに権威を示すことができず、例えば、子どもに嫌われたくないので注意ができないという親の声に応えるしつけアプリがあり、子どもが言うことを聞かない場合など「鬼さん」から電話がかかってくるというものも開発されている。親子がぶつかったり、叱りつけても大丈夫という信頼感を前提にした相互性のあるやりとりが難しい場合も増えているようである。友達親子という言葉もあるが、内実は、表面上の関係をうまくするために娘が気を使って親に本音を話せないという場合が多い。映画「明日の私の作り方」(市川準監督 2007)では現代を生きる高校生の少女が描かれているが、母親を心配し自分のことはあまり親には話さず、迷惑をかけないようにと配慮する姿が見られる。親も深く子どもを見つめるというよりも、双方が気を使い軽い感で関わる様子が描かれる。ぶつかっても大丈夫というような信頼感を背景にした安定のある関係からは遠い印象である。

他には、乳幼児期には必要なのであるが一体的な子どもとの関係から抜けられず、分離が必要な思春期青年期になっても、母親自身が子どもを別個の人格として分離したものと感じられていないことから生じる問題もある。そのような親自身の未熟さのため、子どもが親との関係の上で困難を抱えている場合も多い。しかし子ども当人には親が未熟であるとは認識されていないことも多く、苦しさの理由がわかっていないまま学生相談に来談する形が多いように思われる。逆に親が過剰に子どもを保護することで、子どもが社会性を発達させる機会を奪いがちであると感じられるものもある。大学生になっても、服は全て親に選んでもらって「自分はわから

ないから」などの言葉で、それに違和感を覚えていない学生にも時々出会う。従来、思春期を過ぎると自然に親の選ぶ服は着たくないという感情を持つことがみられたが、そのような意識もない場合も少なくはない。

母親の過剰なコントロールの背後には、核家族であり夫との関係や周囲の人との関係も希薄である場合など、母親が自分自身を相対化してみることの難しさ、母親自身の孤立もある。他にも親自身が育ってきた時代とは異なることが現代では多すぎて、どこに基準を置いて子どもに関わってよいかかわからないという現代特有の難しさもあるように思われる。

また、子ども自身が学校で問題を起こしても、それを「子どもはしていないと言っている」と言い張って、なかったことにしようとする親の様子も岩宮の著書(2009)で描かれるが、子どもの問題という傷を親自身受け止められず、なかったことにしてしまう様子でもあり、傷や葛藤を抱えられなくなっている面があると言える。

筆者自身の事例からの印象では、明確に子どもの問題をなかったことにしようというよりも、基本的に「あまり見ないようにする」「あまり聞かないようにする」「あまり話さないようにする」という親の姿が目立つようになってきた印象がある。例えば、子どもが何か事件を起こしてしまい様々な思いを抱えていて、それを親と一緒に話したく感じていても、親がそのことについて面と向かって話をしようとはしないなどである。先方に謝ったり、家裁へ出向いたりなど、社会に対しての行動はできるのだが、「わかったふう」に装い、世間話をしたりなどはできても、本題そのものについての話はできず、向き合うことが難しいなどである。表面的なやりとりは会話やラインでされても、それ以上はない感じが増えている。「見ない」「聞かない」「話さない」のは、相手の存在自体をあまり意識しないための方法である。自分の世界に留まるための方法でもあり、葛藤を回避するための方法でもある。

同居している自分の子どもを餓死させた両親の虐待が2000年に報じられた。その背景をルポルタージュした杉山の著書(2004)では、夫は家ではゲー

ムにのめり込み、子どもの様子を気にかけなかったことが描かれているが、妻が借金をして督促を受けていても、その額や使用の用途をきくこともしておらず、虐待以外にも、生活全般に「できるだけ見ないこと、聞かないこと」が浸透している様子が伝わる。同居していても「関わらないこと」は十分生じることであり、虐待ほど極端ではないが、普通の家庭にも見られるものである。

何か子どもに困ったことがあっても、「子どもが話したのを待つ」などと思いついて、父親や母親自身が黙ってしまい何も話さないなど、親としてどう教育するか、また教育以前に親が自分自身の感情を生きるという側面が抜け落ちている事例にも多々出会う。子どもも、従来であれば家庭で自然に教えてもらっていたような他者との関わり方などを親から示してもらっていないために、様々な塾やスポーツクラブ、学校やカウンセラーがそれを担うことも増えている。

5) 家族の変貌

極端な事例であるが、母親自身の葛藤や傷の抱えられなさが全面にあると言える虐待について考えたい。2010年夏、3歳の女兒と1歳9か月の男児が餓死し、その遺体が大阪市内のマンションで発見された。母親は風俗店で働きつつ、子どもを放置して男と遊び回る様子をSNSで紹介していたという衝撃的な虐待事件があった。杉山は著書「ルポ 虐待」(2014)でこの事件を2000年に愛知県で起こったネグレクトー3歳の女の子が段ボールの中に入れられたまま食事を与えられず餓死した事件―虐待事件と比較し、日本社会の大きな変貌を示す事例としている。2000年の事件は社宅で生じており、住民票もあり、周囲の人も家族の存在を知っている中で生じた。しかしこの2010年の事件では、すでに住民票のあるところに本家族は住んではおらず、1年の間に数度の転居があり、誰もかれらの住所を特定できなかった。家族の崩壊とともに、家族の定点である住所さえも見えなくなる中で生じたとし、これは日本の家族が変貌していくはざまで生じたと

述べている。

また2000年の事例では、「母親は、餓死しそうになるわが子に死の直前までわずかながら食事を与え、わが子に死の予感を持った時、外出先からまっすぐにわが子のもとに向かい、いつもは点さない灯りをつけた。わが子の死を確認すると、驚いて夫を呼び、夫は警察に電話をし、事件が発覚した。子どもの死は認知が狂った両親を家族や社会へと再びつないだ(P.11)」と述べる。しかし2010年の事件では、「わが子の死を目の当たりにした後、さらに男友達を呼び出し、神戸の観光地にドライブに出かけ、ブログ用に観覧車での写真を撮り、ホテルでセックスした。死さえ母を子どもの元に呼び戻さない。この隔たりが10年の変化なのか(P.11)」と述べている。子どもの餓死を受け止められず、誰にも告げられず、高校の恩師に電話をしても大切な人を亡くしたとしか言えず、唯一風俗店の店長に事実を伝えたが、その後母親はやはり直面できず、上述の通り遊びに行ってしまう。警察を呼ぶ段取りなども全てその店長が行っている。子どもが亡くなってからも現実を全く見ようとしない、そして放置しておこうとする母親の姿がある。

杉山(2004)は、東京にある社会福祉法人子どもの虐待防止センター(ccap)理事長で、東京・江東区で開業する小児精神科医の坂井聖二の言葉を引用している。(きちんと養育されていない子どもたちについて述べる中で)「親たちが、子どもの養育や安全には無頓着で、罪悪感がなくあっけらかんとしている。子育ての優先順位が低く、葛藤がない。子どもより自分のパートナーを優先する。自分が手っ取り早く楽しめればいいという人たちが目立つようになってきた、という印象があります。ちょっとした育児困難のレベルを超え、何日も子どもを放ったらかしにして、食事も与えず、風呂に入れない。でも親は着飾って遊びに行き、おいしいものを食べている。そういうケースが急速に増えています。生活保護の手当てが入ると気まぐれに子どもをファミレスに連れて行き、服を買ってやる。子どもは大喜びです。でも翌日にはどうなるか。ネグレクトは経済的に困難だからと

いうわけではありません。貧しい人は貧しいなりに子どもを最優先します。社会全体が変化していることは、保育園や学校などの現場が感じているのではないのでしょうか。」子どもに対して憎しみや明確な嫌悪感があるのではなく、親がただただそうとも気づかないまま自分中心である様子がわかる。憎しみや明確な嫌悪があるのなら、それは一人の対象として子どもが認識されていると言えるが、この状況はそうではなく、子どもが一人の人間として親に意識されてはいないかのようなのである。子どもと親の二者関係と言えない状況ではないか。先の虐待事例は、極端ではあるが、これに先駆けるような事例だったのではないだろうか。

子育てでは、経済的なことが親の機能の柱のように思われているが、心的なことも含め、親としての機能は複雑で多岐にわたる。このような親としての機能の弱さ、社会性の弱さ、幼児性、未熟性は、学生相談で聞く母親や父親たちの様子からも、2010年の虐待事件ほど極端ではないが、日々感じる場所である。また、杉山は、女性福祉相談員尾形の言葉として、夜子供を置いて仕事にでかける母親に悪いことをしているという意識がなく、家族を作ることにこだわらずに子供を持つ女性たちが多いこと、しかし子どもの養育は家族の機能の中で最も大変なことであり、だから虐待が突出する(2004, P.282-283)と述べ、現代では、家族が崩壊している事例の多くなっていることを述べる。

親としての機能が弱ってきているのか、あるいは昔であれば親としての機能の弱さを祖父母などを含む家全体、あるいは近所との関係という社会全体で補っていたものが失われているのか、おそらくその両方なのかもしれない。「育児支援の現場で聞けば、子どもを抱えて、家を失い、友人宅を転々とする若いシングルマザーは実は少なくない—略—こうした女性たちはパートナーを次々に変える。」と杉山(2014, P19)は述べている。まさに特定の住所やパートナー、実家という定点になりうるもの自体がそうならなくなっている様子を知ることができる。

6) 自分の気持ちをめぐって—過敏さと否定

現代の若者についての特徴として、その一つには自分の気持ちへの過敏さと他の人の見えなさがあげられる。それをやりたいとか、やりたくないなど、自分の気持ちへの過剰な集中があり、気持ちをわきに置いて「やるべきこと」をするという面が弱い。やるべきこととやりたくない気持ちの葛藤などはなく、「やりたくない」「いやだ」と過剰に自分の気持ちに焦点が当たる。例えば「授業で発表しなければいけない。いやだ。いやでもしないといけない。仕方がないから我慢して発表する」というのではなく、「いやだ。できない。しない。休む。」と簡単にそこから逃げてしまう。他の人もいやなのだということは全く意識されない。自分の気持ちを大切にすぎで、「逃げない」ことを学ぶ機会が奪われている面もある。また、逃げた後もそれに自分では何も対処をせず、「放置」しておくことで自然に勝手に周りが解決してくれることを待っている面もある。

一方、自分の気持ちへの過剰な集中の反面、特にネガティブな気持ちや感覚を否定して生きる側面もある。例えば、経済効率を最も優先する場合、風俗でのアルバイトを自ら選択する女子も少なくない。風俗への後ろ暗い感情はあまり感じられてはいない。彼に誕生日プレゼントをあげたいなどの、こちらから見ると風俗で働く必然性もないような理由だったり、家が貧しいわけでもなく、学歴もあるので、こちらとしては、どうして？と思わざるを得ない面もある。〈気持ち悪いこともあるでしょう？嫌でしょう？〉と尋ねても、「それはそうだけど、そんな風を感じるのは私のわがままだから」と自分の本当の気持ちを否定し、理屈で自分を抑え込む場合も見られる。他にも自分に嫌なことをしてきた友達の話に対して〈嫌だったね〉と言っても「いえ、嫌と思ったらいけないと思います。それで終わってしまうから。」など否定的な気持ちに触れられないこともよく見られる。面接の進行に伴って、否定された感情を代弁するように身体症状を呈し、今までの自分のあり方を見直さざるを得なくなることが、自分の気持ちや体に気づいていく契機になる場合も多い。

7) 記憶のなさ—主体的自己の消し去り

「あまり記憶がない」と学生相談で話すものが少なくない。例えば〈その気持ちはいつくらいから感じてたの?〉など聞いても「さあ、わかりません」と即答する学生は、記憶を手繰って、自分自身で過去の気持ちを振り返ることを全くしないようであった。また「一日いっぱい色んなことをしても、寝るときにはまるで何もなかったかのように、今日のことの記憶がない。こんなに頑張ってるのに何も記憶がないなんて、どうしたらいいのかと思う」という学生もいた。解離性障害や、記憶障害ではない。記憶の余韻や、その場の情緒を感じることなく過ごしていたようである。このような場合、自分自身の身体感覚からも非常に遠く、疲れを意識できないケースも多い。この事例では、心理療法が進んでいくにつれて、記憶の余韻が残る夢をみたり、身体に非常に疲れが生じるのを感じたりできるようになり、リアリティーが生まれていった。

学生に授業で「自分自身に起こったできごとや思いでなどの記憶が自分にはあまりない方ではないかと思う人」と聞いてみると、100人いる学生のうち、6から7割ほどが手をあげることがあった。全てスマホや写真で済ませるので、気持ちを言葉で振り返り内面に溜める習慣がないためと、今この身体性自体もあまりなく、どこか傍観者の的に生きているので現実感がないためでもあると思われる。また、素朴な気持ちを他者とSNSなどではなく生で分かち合う体験自体の乏しさも、記憶の薄さにつながっているようである。

野間には以下のように述べている。

「精神科外来の診察室において、世に憤り挫折の情念を吐露する若者は減り、その代わり、寄る辺のない空疎な想いを抱え周囲への不満を口ごもりながら、目下の気分を明るくする薬のみを要求する者が増えた。中略—診察室では人生を語り合い自らの道を模索することより、ただただ苦痛をすぐに取り除いてもらうことだけが期待されているよ

うにも感じられる。(2012b, ii)」

と述べている。怒りや挫折は、リアリティーに触れることでもあるが、そのようなことは減り、ただ自分の気分を整えることを望むこともまた、葛藤のない世界への留保を思わせるものである。

また、現代の若者について「主体の拡散(2012a, p137)」「主体的自己の消し去り(2012a, p138)」という言葉で以下のように述べる。

「現代の若者は、あたかも解離性同一性障害患者のように周囲の状況に容易に合わせてしまうため、周囲の人からみても自分自身にとっても行動の真意がわかりづらく、言動に一貫性を欠いているように思われることがある。略—しかしかたに人格が交代し自己が変転しているように見えても、じつはさまざまな人格的自己の経験のすべてを一貫して眺めている経験主体としての「主体的自己」が、人格的自己の背後にしっかりと存在している。ただ、現実の苦悩のなかで、あたかも主体的自己は存在せず、不動的な人格的自己がすべてであるかのように振る舞っているだけである。主体的自己が苦悩のすべてを引き受けることができず、主体的自己の存在そのものを消し去らなければならないほど、現実に伴う苦悩が大きいと見なすべきだろう。(2012a, p137)」

これも、半ば意識的に主体的自己を消し去ることで、現実や葛藤に触れることから距離を取ることを意味しているように思われる。しかし、野間とは異なる見方となるが、実際に多数のキャラを生きる若者の話を聞いてみると、そのような振る舞い自体が形式化し、逆に意識として定着していくことが見えてくる。つまり最初は一時的に苦悩を避けるためであったとしても、その態度を続けること自体により、苦悩をより感じにくい意識が創りだされていく側面があるということである。苦悩があつて、それを避

けるためというよりも、自分が主体として関わることへの留保(その背後には恐怖があるのかもしれない)に重点が置かれた意識のあり方が形成されていく側面があるように思われる。先述した虐待事例にもそのような側面があると言えるのではないだろうか。

3. 従来の心性と現代的心性

上述したものを通してみると、従来の心的世界と新たに生まれてきている葛藤のない現代的な心的世界があるといえるのではないだろうか。葛藤に耐えられないのではなく、葛藤しないという意識のあり方が現代的な意識といえる。以下にまとめる。

①従来の心理療法が通用する心性(葛藤保持力がある)

自分が何を感じ、どのようなことがあって苦しいのかを抱え、心にためておくこともできる。症状があり、自分自身の問題として、そのような症状や心的状態などを語ることができる。あるいは何らかの形で表現することができる。セラピストの反応への意識もあり、話をするときに、自分の話がきちんと伝わっているかなどへの配慮もすることができる。苦しみをとどめる内面性がすでに成立している場合が多い。

夢や箱庭も、象徴性を含んだものがストーリーとして展開したり、事例の流れ自体がセラピストに読みやすいものであることが多い。治療者が鏡として存在するという役割が意味を持つ。白紙で中立的であることにより、本人が治療者に対して自分の内面を映し出し、治療者を介し、自分自身に自己関係的に関われる可能性によって、治療が展開していく面がある。心的問題に焦点を当てていくことで、本人が自分でよりよい自己実現の道を歩んでいく手助けとなることが多い。聞いている側としては、理解し、受容、共感などがしやすい。ロジャーズのカウンセリングや、転移関係を扱う精神分析なども通用する。病態水準的な視点が役に立つことが多い。

②現代的心性(葛藤保持力のなさの特徴とする)

大きく、以下のように分類を試みた。

1. 自分自身のつらさなどが感じられにくく、苦しみを自分のこととして語りにくい。また非言語的にも表現しにくい。聞いている側としては、感情移入がしにくかったり、共感が難しい場合もある。

1) 自閉症、発達障害など自閉症スペクトラムもここに含まれる。相談には人から勧められたり、自分自身の主体的判断ではない場合も多い。田中は心的未生性として述べているように、埋没できる何らかの子宮的な環境からいまだ心理的に生まれていない状態と考えられる。ばらばらで、自分をまとめようとしてもまとめにくく、主体を立ち上がらせることができない。自己感、主体や内面がいかに成立していくのかがポイントになる。

2) 定形発達からのずれがあるなどで、自閉症スペクトラムには入らないが発達がゆっくりであったり、幼さ、未熟さ、経験不足が目につくような場合もある。主体的な関わりが苦手であったり、弱い場合も含まれる。悩みを抱えての来談というよりも、現実生活中での困ったことがあり来談という印象が強い。よって継続的な来談とはならず、困ったことがあるたびに相談者を訪れる場合もある。自分自身を客観視したり、リアリティに触れにくい印象。主体や内面がいかに成立していくのかがポイントになる。

3) 定形発達ではあるが、あえて悩みや苦しみに直面しない、葛藤に直面しないあり方を生きている。しかし就職活動など社会から何らかの主体としての反応を要請される事態が生じた場合には、主体としての反応が難しく、葛藤できなさや反応できなさが問題となって露呈する場合もある。

2. 辛さや苦しみが感じられており、症状もあるが、衝動性や行動化があり、内面に苦しみを貯めにくい。心身症など身体化が主であり、内面に苦しみがつながりにくい場合もここに含まれる。いかにして苦しみをため

る内面が成立していくのか、内面化がいかにして可能になるかが焦点ではないか。これは従来からあり、どちらかという、葛藤に耐えられないという側面もあり、同じ葛藤がないという場合にも1で述べたものとはそのニュアンスとして若干異なる点もあると思われる。

以上の分類を仮説的に試みてみたが、現代的心性では、事例の流れ自体がセラピスト側につかみにくかったり、夢も象徴性のみでは理解しにくい場合も多く、時にはあまり夢が語られない(見られない)場合もある。自分自身を語ることが難しいので、それを映し返す鏡としてのセラピストのままでは、何も映しだせない。つまり白紙で中立のセラピストであることが治療的な効果を持ちにくい。本人の苦悩が分かりにくく、語り自体に理解や共感が難しい場合もある。心的問題としてのみクライアントに関わるよりも、クライアントが現実と実際に関わっていくことが治療的意味を持つ場合もある。そのため、現実的な環境調整がまずセラピストの仕事となる場合も多々ある。従来の心理療法では行動化はできるだけ避けるべきと考えられていたが、経験不足や、現実との接触自体が不足していることも多いので、実際に行動することによって、心的成長が促される場合も多い。

4. 「非二の意識」

様々の葛藤のない心性について考える時、そもそも葛藤が生まれるのはどうということかという視点に照らすと、河合(1988, p129)の以下の言葉が参考になる。

「一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく、何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ、そこに対立、あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ、「一」の概念も生じてくると考えられる。二はこのように分割、対立を仮定するものであり、葛藤と結びつきやすい。」(下線は筆者による)

この言葉から、葛藤が生じにくいということは「二」の意識が生じにくいということであり、「非二の意識」と言えるかもしれない。全く一ではない、けれども二の意識ほど明確な分割・分離や対立、葛藤がない。現代において、自分のことを語るのが難しく、悩みが拡散しやすい状況というのは、「一」ではないが、明確な「二」の意識でもない、「非二の意識」ではないだろうか。それに関連するものとして、Jungは、以下のように述べている。

「二への分割は、潜在性・可能性の状態である一なる世界をリアリティーに移行させるためには必要不可欠であった。リアリティーは諸物の多様性によって構成されている。しかし、一は数ではない。二こそが最初の数である。そして、その二をもって、多様性とリアリティーが始まるのである」(CW14, par. 659)

Jungや河合の言葉からは、「二」という数は意識やリアリティーと関わっていることがわかる。葛藤が生じにくい、二の意識が生じにくい「非二の意識」は、リアリティーには開かれにくいことを意味するともいえる。

二の世界は、分割の結果生じた二項対立の世界ともいえる。神話によって最初に世界が分割され、そこから始まるように、この世とあの世、男と女、昼と夜、自分と他者など、そのような分割があるからこそ、我々は世界を意識することができ、世界を言葉で語ることができる。言葉というのは、概念として何かを全体から切り取るからこそ生じるものであり、そのような分割が生じない全体性のままであるかぎり発生しない。自分で自分を語ることができるのは、このような「二の意識」を前提としていたと考えられるのではないか。

最初に述べた岩宮の事例での高校生のように、自分の居場所が不確かで、この現実の世界に定位しにくければ、自分のいる「今、ここ」が成立しにくい。常にスマホやネットで今ここではない世界に没入している状態であれば、体はここにあるうとも、自分はどこにいるのかよくわからない状況が生まれる。自分の現在地が定位できないと、自分以外の世界も構造化さ

れにくい。先の虐待事例における主体のあり方にも重なるところであろう。Jung(1997)は以下のように述べている。

「つまりその個人が身体の中にいるときにそれが起きなければ、何も生まれるわけがないのです。もしも魂が、未開の状態ですうなりうるように分離しようとすると、人は催眠にかかって一種の夢中遊行状態かトランスに陥っているだけであり、その状態で経験したことは感じられていません。身体で経験されたのではないからです。まず身体、大地に戻ってはじめて個性化が起き、そこでやっとうものごとはほんものになります(1396)。」また「この女性は大地に、彼女自身の私的で陳腐な現実に戻らなければなりません。そうでなければ、彼女はまさにあの生命の流れ、あの川全体です。個性化はそれが自覚された時に、つまりそれに注目する人がいるときに起きます。そうでなければ、それは、砂漠に吹く風が奏でる永遠の旋律のようなものです。」

これらの文章からは、リアリティーに開かれるためには、身体性が非常に重要なこと、そして、現実をみつめるまなざしをもつ誰かが必要であることがわかる。出来事を見つめ認識しないかぎり、ただ誰も気づかない自然現象のように何も起こらなかったに等しいということである。見つめる目をもつこと、注目する人がいることが非常に重要であると言える。そしてさらに続けて述べている。

「ここでも生に触れることのない道を生きています。いつも、一種の夢のなかで生きています。まるで何も起きはしなかったかのように、ほんとうでなかったかのように。生の外で生きていればいるほど、そのことからいっそう自分を守ろうとします。そういう人はあちら側、自分を安全にするフィクションの側に住んでいます。それはつねに生に対する安全策、今ここに対する安全策です。あるがままのものを感

受しません。今ここの態度があれば、状況を最大限に活かすことになります。言わなければならないことを言い、すべきことをします。」
「人は何を経験するにも、それを非現実性という霧で覆うことができます。(1402)

これらは、ユングの患者のアクティブイマジネーションのイメージを分析している言葉であるが、そのまま現代の意識にもあてはまるように思え、記憶があまりないという特徴を考える一つの視点を与えてくれるように思われる。またオーソオックスな「二の意識」と「非二の意識」を考える時、ユングの以下の言葉が参考になる。

「意識が単なる映し返しではなく、創造的なだけでなく、完全な認識であるのなら、責任という要素を持っていなければなりません。つまりエトスがそれに結びついていなければならないのです。ある態度ですね。掘りどころにできるある態度なしにものごとを認識することは不可能です。認識するには二つの点の存在が必要です。すべてを見ている目だけ、すなわち、言うなれば世界の諸内容をその中に注ぎ入れる全く無関心なコップないし器だけではいけません。そのコップが、あるやり方でその諸内容に反応しなければなりません。つまり、それ自身の観点、それ自身の態度を持っていないといけないのです。ですから人は、二つのことがわかる必要があります。対象そのものや状況、およびその状況における自分自身です。自分の役割、どう反応すればよいかわかってはじめて、自分の認識を定式化したり、知覚したりできます。」「それなしには状況をあらゆる細部にわたって評価することができない、ある態度や原理の細部なのです。たとえば、その人自身を含めない、一種の審美的な認識かもしれない。責任あるやり方でその人がなかに入ってくるのが絶対に必要なのです。状況を評価していないなら、まさにその人はなかにいません。特別に上等の写

真機でもいいわけです。」

自分がいて、自分が見たことに対して自分なりのやり方で反応すること、ユングは出来事に自分を関わらせて初めて、責任が生じ、自分が真に出来事の中に入っていけるのだと述べている。また、「反省的な考察を伴わない経験などありえません。なぜなら「経験」は同化の過程であり、それなくしてはそもそもいかなる理解もありえないからです。（心理学と宗教 P10）」とも述べる。自分をふり返るという自己意識のない状態では、出来事が経験にならないということでもあろう。

「二の意識」であれば、自分と世界が分離しているからこそ、反応し、出来事に入っていき、しかもそれを反省的に振り返ることができる。しかし、「非二の意識」では、世界と自分の分離が明確に成立していないため、出来事に自分から入っていき、かつその自分を自分で見つめるということが成立しないのではないか。出来事を外から眺めての評論家的な言説や、写真機や機械のように現実を映すだけになってしまったり、逆に一度没入してしまうと、入り込みすぎて、自分しか見えず、周りが見えなくなるなどが生じると言える。いずれにしても、リアリティーに開かれにくいことが想像できる。そのような心性がリアリティーに開かれるためには、多くの時間とエネルギーが必要であると言える。

おわりに

本論では、現代の意識における葛藤のなさの諸側面について考察した。このような新たな意識が生まれてきている中で心理療法の可能性について検討していくことは、今後も意味のあることと思われる。

参考文献

藍沢鎮雄(1985)「一対人恐怖症に関する考察―森田療法の立場から」精神科

- Mook12巻, 対人恐怖症 pp136-143
- 馬場謙一(1985)「一対人恐怖症に関する考察—精神分析的な立場から」精神科Mook12巻, 対人恐怖症 pp144-152
- 橋本尚子(2017)「現代の意識と教育相談」京都学園大学人間文化研究 第38号 pp37-48
- 畑中千紘(2016)「非定型化する若者世代のこころ—現代の対人恐怖とアグレッションのかたち」河合俊雄・田中康裕編 発達の非定型化と心理療法 創元社 pp156-179
- 平井正三「自閉症中核群への精神分析的アプローチ」福本修 平井正三編 精神分析から見た成人の自閉スペクトラム —中核群から多様な拡がりへ pp 2-19 2016 誠信書房
- 広沢正孝(2015)学生相談室からみた「こころの構造」岩崎学術出版社
- 市川準(2007)映画 明日の私の作り方 日活
- 岩宮恵子(2015)「イメージが治癒力を持つとき」箱庭療法学研究 第28巻 2号 pp.69-83
- 岩宮恵子(2009)フツウの子の思春期 岩波書店
- 河合隼雄(1975)カウンセリングと人間性 創元社
- 河合隼雄(2009)心理療法序説 岩波現代文庫
- 河合隼雄(1986)「夢分析による学校恐怖症高校生の治療例」心理療法論考 新曜社 pp26-42
- 河合隼雄(1988)昔話の深層 福音館書店 p101
- 河合隼雄(2001)「ラストインタビュー(論座)」2008 1, 2月号 河合隼雄 河出書房新社 pp243-255
- 河合俊雄(2016)「発達障害の増加と発達の非定型化」河合俊雄・田中康裕編 発達の非定型化と心理療法 創元社 pp 4-24
- 中村勇二郎(1985)「一対人恐怖症の特殊なかたち・近縁の病態— 中年期の対人恐怖症」精神科Mook12巻, 対人恐怖症 pp11-19
- 中野香織(2014)モードとエロスと資本 集英社新書
- 成田喜弘(2002)強迫性障害 病態と治療 医学書院
- 鍋田恭孝・宮岡等(1985)「一対人恐怖症の特殊なかたち・近縁の病態—醜形恐怖症」精神科Mook12巻, 対人恐怖症 pp29-41
- 野間俊一(2012a)解離する生命 みすず書房
- 野間俊一(2012b)身体の時間 筑摩書房
- 杉山春(2004)ネグレクト 小学館
- 杉山春(2014)ルポ虐待—大阪二児置き去り事件 筑摩書房
- 武野俊哉(2010)ユング心理学を診療に生かす, 臨床精神医学 39(1), 51-58
- 田中康裕(2010)「発達障害と現代の心理療法—「自己の無効化」による「治療で

- ない治療」としての自己展開」河合俊雄編 発達障害への心理療法的アプローチ 創元社 pp180-203
- 田中康裕(2013)「未だ生まれざる者への心理療法—大人の発達障害における症状とイメージ pp21-41 河合俊雄・田中康裕編「大人の発達障害の見立てと心理療法」創元社
- 田中康裕(2016)「発達障害の広がり」と心理療法—グレイゾーンの細やかな識別と「発達の非定型化」という視点」pp122-143 河合俊雄・田中康裕編「発達の非定型化と心理療法」創元社
- 谷本菜穂(2008)美容整形と化粧の社会学 新曜社
- 山下格・笠原俊彦(1985)「対人恐怖症の概念と臨床像」精神科Mook12巻 pp 1-10
- 養老武(2014)「自分」の壁 新潮新書
- Jung, C.G.(1955/1970)Mysterium Coniunctionis: An Inquiry into the Separation and Synthesis of Psychic Opposites in Alchemy, The Collected Works of C.G. Jung, vol.14. Routledge & kegan paul(池田紘一訳(1995) 結合の神秘 I 人文書院)
- Jung, C.G.(1960/1970)Psychology and Religion: The Collected Works of C.G. Jung, vol.11. Routledge & kegan paul(村本詔司訳(1989): 心理学と宗教 人文書院)
- Jung, C.G.(2011)Visions: Notes of the Seminar Given in 1930-1934 Princeton University Press; y First edition(1997), ヴィジョンセミナー 2 氏原寛 老松克博監訳 創元社